意訳　北海道枝幸砂金地巡見

へるふね　perupnei

目次

目次

北海道枝幸砂金地巡見　福地信世　雑誌太陽　明治３４年１月５日

北海道枝幸地方は明治３０年代ゴールドラッシュに沸いた地である。理学士福地信世は、明治３３年枝幸砂金地を調査し、地質学雑誌に「北海道枝幸砂金地に関する地質学的観察」を掲載したが、それに先立って、雑誌太陽に紀行文を投稿した。本書はその内容を意訳紹介するものである。

意訳　北海道枝幸砂金地巡見

明治３２年、枝幸砂金の噂が日本中に広まり、北海道には無尽蔵の砂金がある様に伝えられた。私もぜひ北海道の砂金地を調査してみたいと思っていたが、明治３３年夏、東京帝国大学から北海道の地質調査を命じられ、およそ１００日間現地に赴くことができた。砂金地の学術的な話は別にして、ここでは巡回中の雑話を記すが、今回巡回した行程は以下のとおりである。

▲明治３３年７月２４日東京発、２６日札幌着
▲８月１日札幌発、小樽から船で稚内へ、５日稚内を出発し枝幸に着く
▲８月６日から９月１７日まで枝幸砂金地巡見
▲９月２２日から２５日までフーレップ、オチシュベツを巡見
▲９月２１日神保博士東京発、２８日枝幸着
▲１０月１日から１１日まで神保博士に従って再び枝幸砂金地巡見
▲１０月１３日枝幸発、１５日札幌着
▲１０月１７日から２６日まで夕張砂金地巡見、２７日札幌着
▲１０月２９日から１１月１日まで神保博士に従って空知砂金地巡見
▲１１月３日神保博士と共に札幌発、５日東京着

第１　出発前の準備

神保博士は私が最も尊敬する恩師である。博士は北海道旅行に慣れており、旅行中に注意すべき点を伺った。私が出発前に最も心配だったのは、熊と蚤と蚊であるが、蚤は寝袋で首だけ出して寝れば良く、蚊は網をかぶれば良いと聞いたからそれぞれ適当なものを用意した。

熊について、大抵は熊の方で逃げてくれ、不意に出会った場合は襲って来る事もあるがその様な事は稀で、北海道の奥地に立ち入る者は、大きな声で歌でも歌い、ラッパを吹きベルを鳴らして進めば大丈夫という。私は、臆病ではないが、熊については少し臆した。しかし、拳銃や短刀を持っていっても、猛烈な熊を防ぐことはできないと思い、運を天に任せ何の用意もしなかった。後で考えれば、拳銃など持って行ったものなら、皆の笑いものになったであろう。

さて、私は準備を整え７月２４日上野駅に行った。汽車に乗り込むと、親友である工科学生の曽我、平澤が乗ってきた。聞けば両者は、研究のため枝幸へ行くという。偶然一緒になった事を喜び、汽車の中で雑談をしたり、居眠りをしたりしてその日を過ごし２５日朝青森駅に着いた。

２５日昼、汽船敦賀丸に乗って青森を出たが、霧が濃く何も見えない。その内風も強

くなって船が揺れ、顔色騒然苦痛に耐え２６日早朝何とか室蘭に着いた。午前の汽車で札幌に向かい、その日は山形屋に泊まった。

２７日、小樽の回漕店に、北見行汽船の運行状況を聞くと、定期船都丸が出発したばかりで次航は８月８日頃という。不定期船で１００トン未満なら毎日出るが、またも船中で苦しんではと思い、４～５日船待ちをしていた。その間札幌、小樽、手宮を見学できたのは儲けものである。

東京で枝幸の話を聞くと、「枝幸は熊が多く危険である」「食料不足で困難が多い」「砂金掘りで人足が雇えない」「脚気が多く注意が必要」等という。そのため、今回の出張は無駄に終わるのではないかと心配したが、札幌で聞くと、枝幸は中々便利で、東京とほとんど変わらないという。何が本当なのか解らないが、なるべく良い様に願った。

８月１日、６２０トンの青龍丸が稚内に向かうと聞き３人で乗り込んだ。船は正午に小樽を出発したが、この日は天気が良く快適で、船は増毛、天売、焼尻、利尻、礼文に寄港した。船中退屈だったので釣りをしたが、糸を垂れると直ぐに釣れ、たちまち大漁となった。その都度ボーイに料理させ船員船客と共に食した。

３日午後稚内に着き、木下という旅館に投宿。４日は雨、５日朝、第二凌波丸という蒸気船に乗り、午後枝幸着。枝幸は有名な漁場で、砂金景気もあって中々繁華である。市街は整然として旅館等も整い、遊郭や料理店もあり、芸妓も多くいるとの事で、出発前に想像した枝幸とは月と亀の差があった。枝幸市街がこの様に繁華であるので、枝幸砂金地も必ずや便利であろう。

東京を出発して１３日目にようやく着いたが、この様に長い時間を費やしたのは、定期船の確認もせず、無暗に東京を飛び出したからである。よく調べて出発すれば、僅か５日で着く。５日で行けるところを１３日も費やすのは、飛脚としては馬鹿げているが、書生としては無駄ではなかったと、枝幸到着後負け惜しみを言った。

第２　ウソタン砂金地巡見

枝幸砂金地で鉱区を持っている者は多いが、廣谷組合、輪島組合は最も広い鉱区を持っており、私はある事から廣谷組合に優遇された。また、廣谷組合と親密な中川という者が私の中学時代の同窓で、研究のため砂金を採取しているという。砂金地の事情に詳しいため、中川に案内を頼み、ウソタン、ペイチャンを見ることにした。

ウソタン、ペイチャンは最も砂金に富み、枝幸が有名になったのはこの２か所のためである。ここは場所も良く、廣谷組合の事務所もあり、巡見には非常に都合が良い。

８日、ウソタンに行く。枝幸市街から海岸を北に進み、左折して樹林を通り、ウバソマナイに沿って分水嶺を超え、オチキリコアンウソタンナイという支流に沿って本流に出ると廣谷組合の事務所がある。この道は３２年７月に廣谷組合が開いたが、馬が通ることができるので馬道と言う。道中私が驚いたのは、イタドリとアザミが林の様になっていることと、トドマツとエゾマツの森が、本州では見られない美観であることである。

ウソタンの事を話せば、この川は頓別川の支流で、事務所の場所は頓別川から４里程上流で、ウソタンと言えばここを指すのが通例である。ウソタンには廣谷組合と輪島組合の事務所、請願巡査の駐在所があり、北見屋、田中商店という商店が、日用品、米、味噌等の外に酒や菓子を売り、砂金の買い入れも行っている。ウソタンではこの外に、大

福の様なものを売る店や居酒屋の様なものもある。

枝幸で最も名高いババコロシはこの地の下流にあり、ウソタン馬道、ウソタン中の川、ウソタン秋山採取所は、事務所から数町～２里である。事務所は金田の中心であり、山の中としてはかなり賑やかで、ウソタンにおける城下とも言うべきところである。

私は廣谷組合の事務所に泊まったが、そこには客室があり、寝具があり、風呂もある。湯に浸かり夕餉を食し月見をしたが、８月初旬であるのに中々涼しい。ウソタンの川辺に腰掛けたり、散歩をしたり、都会では思いもよらない事である。特に東京では、砂金地は、泊まるに家なく、食うに飯なきと思っていたので、この楽しみをこの山中で得られたのは一層喜ばしく思えた。

ウソタンの大部分は廣谷組合と輪島組合の鉱区だが、ウソタン中の川合点上流は、秋山という人の鉱区になっており、アメリカ人のジョスとスコイヤという者が採取をしている。

廣谷と輪島の両組合では、直接採取に従事せず、採取人から１ヶ月６円～１２円の現金又は砂金を納めさせ、その鉱区内で自由に掘らせている。このため採取人は、働けば働く程利益になるから非常に勤勉である。

秋山事務所では、人夫を使って直接採取しており、工務長が大きな目で睨んでいるが、人夫は勤勉ではない、欲とはそういうものである。

さて、ウソタンで見物すべきは、ババコロシと秋山採取所である。ババコロシとは明治３１年９月、そこには砂金が多くあるため数百人が集まっていた。大勢で大きなトドマツの根を掘ったために木が倒れ、女が下敷きになって死んだのである。女の年はまだ３０余で、さほどババァではなかったが、とにかくこの女が死んだ事から、その地をババコロシと言う。

ババコロシは今でも砂金に富むが、そこに集まる採取人は最上地方の者が多く、カッチャの使い方が巧みである。ババコロシは、砂金掘りの達人が集まり、特に、日本固有の採取法を見るには最高である。

次に、秋山採取所であるが、ババコロシが日本固有なのに対し、ここはアメリカ人が主任のため、カリフォルニア式である。幅１尺２～３寸、長さ１２尺の樋を２～３０本連ね、人夫数十人を使い、いわゆる樋流しと言う方法で採取するのだがその様は中々壮観である。

第３　ペイチャン砂金地巡見

１０日は天気が良く、私は中川等と共に廣谷事務所を出発した。まずウソタン中の川に沿って上るのだが、沿ってというか川を遡るのである。北海道の未開地はどこも川の中を行くが、枝幸砂金地もそのとおりである。

水源まで登って分水嶺を越え、ペイチャンに向かうが、途中まで来ると日は暮れかかり腹が減る。道はまだまだ遠く、心ばかり急ぐが足は進まず、石につまずき木に当たり、ある者は川に落ち、蛙の真似をして一同笑いの種であった。日が暮れて、ようやくペイチャン廣谷事務所に着き、食事を済ませ酒を飲み、この日の失敗談を暴露しながら寝入った。

ペイチャン廣谷事務所は、ペイチャン小川合点にあるが、ここは枝幸砂金地中最も繁華な場所である。ウソタン廣谷事務所を城下と評したが、ここは市場と評すべきで、繁

華の模様が何となく違うのである。

ペイチャン小川の合点は、明治３２年夏、空前絶後の大繁栄を極めた。米１升買うのに砂金数匁を使い、１日もその地を離れず掘り続けたという話は、当時ここがいかに盛んであったかを物語る。現在枝幸で流行する俗謡に「熊が出ようが、何怖かろう、行けやペイチャン、金の山」というのがあるが、その当時の状況を良く表している。

ペイチャン小川の繁栄は昨年程ではないが、今も中々盛んである。建物は輪島組合の事務所、長内の事務所、警察等である。廣谷組合の出張所は仮小屋で、商店は田中商店、東京屋、北見屋等があり、商店の外にそば屋、豆腐屋、菓子屋、てんぷら屋、風呂屋、理髪店、料理屋などもあり、女郎屋もあるという。

枝幸からここへ行くには、行程僅か７里である。平坦なところが多く１日で行くことができ、馬も通ることができるので、ペイチャンもウソタンに劣らない便利な所である。

ペイチャン小川、ペイチャン本流に鉱区を持っている者は、皆ウソタンと同じ方法で、採取人から料金を徴して掘らせている。採取人はカイ掘り、流し掘り等様々な方法で採取しているが、この地で一見の価値あるものは、河段沈殿層中の砂金を採るために、横穴を掘るトンネル掘りという方法と、大掛かりな樋流しの方法である。トンネルは数町の長さのものがあり、元々抗夫であった採取人には、非常に巧みにトンネルを掘る者もいる。

樋流しはウソタンでアメリカ人が行っているものだが、現在はウソタンよりもこちらの方が進歩している。ウソタンは樋を下で支えているが、ここでは上から釣っている。北海道の川は出水することが多く、樋を下から支えると出水の度に流されるが、上から釣っていればその心配が無いからである。

１１日はペイチャン小川を見て、更に２～３町上流の金鉱を見た。金鉱は石英脈で、鉱石の標本として立派である。巡見の時は大きな鉱脈は無かったが、その後試掘をしてずいぶん違った様子になっている。

１２日は雨だったが、翌日枝幸で用事があるため中川等と共に下山した。朝８時にペイチャンを出て馬道を通ったが、道の悪さに閉口した。「泥濘深き」を道の悪さの形容に用いるが、この道の泥は、餡と汁粉の中間位の柔らかさで、１尺位の深さがある。道の真ん中は到底歩けず、傍らの笹を踏んで歩くのだが、上から下まで泥まみれである。峠の茶屋に到着したときには、土製の洋服を着た埴輪土偶の様な有様であった。

茶屋より先は下りである。１里もせず追分というところに出るが、道は茶屋までと大差ない。追分からパンケナイの本流を下り、１里程で原野という殖民地の一部に達する。そこには、柳原という旅館の様なものがあり、多少人家が集まっていて、ここから枝幸までは３里半である。

北海道にはヤチという湿り地が多くある。ヤチは泥炭地の様なもので、植物が腐ったものと泥土が積み重なり、水を含んでジクジクしている。一見水たまりかと思って足を入れると、ズブズブと腰位まで埋まってしまう。原野と枝幸の間は、このヤチが多くあるため、舟を雇って行く事にした。舟はアイヌの丸木舟である。丸木舟は誠に窮屈なものであるが、何とかポロベツの下流に着き、上陸して１里程陸行し、夜に入る頃に枝幸の市街に着いた。

第４　斜内、ケモマナイ巡回

１４日は廣谷組合の人夫を連れて海岸を北上し、オチキリの砂金地を見た。オチキリはウソタン、ペイチャンに比べれば小さく、採取人は主にカイ掘りと流し掘りをしていた。

１５日は斜内海岸を巡見した。

１６日はトイマキへ行き、支流タンネピンナイに入った。タンネピンナイに入ったのは、ここを上り分水嶺を越えれば、ウエンナイに出ると思ったからである。しかし、居合わせた採取人に尋ねると、分水嶺を越えるとケモマナイに出るという。引き返すのもどうかと思い、そのまま上りケモマナイの上流に出た。ここから半里程下ればケモマナイ採金事務所があり、この日は事務所に泊めてもらった。ケモマナイはペイチャン等に比べれば微々たるもので、事務所も小屋で、その一部に商店があり採取人の日用品を給している。

１７日は早朝から濃霧だった。この日は、ケモマナイを下り、ソートルオマナイという支流に入り、分水嶺を越えてウエンナイに出、海岸を通って枝幸の市街に戻る予定である。９時頃雨が降ってきたが、１０時頃ようやくケモマナイ下流の滝まで来た。その下にソートルオマナイがあると思ったが、その形跡が無いので、採取人にウエンナイまで案内してもらった。知らない場所では良き案内人を頼むのが良い。

ウエンナイに出た時は、天気が晴れ、これから先は道も良いので、揚々と枝幸市街に帰った。旅館に帰ってみれば、平澤がケモマナイその他の砂金地を巡見し終わり、帰京の途につこうとしていた。その夜は互いにケモマナイ、トイマキ等の実見談で夜を更かした。学術的な話しをしたのは、東京以来この日が初めてで殊更面白く思った。

第５　再びウソタン、ペイチャン巡見、パンケナイ、トイマキの踏査。

８月２０日、再びウソタンに行った。前回はウバソマナイを通って行ったから、今回はオチキリを通った。この道は馬道より近いが急である。気温３３℃、今年の最高気温であった。

２１日、ウソタン支流エトルシュオマプを巡回した。ここは、昨年１０月５日に２０５匁という枝幸最大の金塊が出たところである。３２年夏までは、金が無いとして、「ナイ川」と呼ばれていたが、今日では相当あるのは明らかである。

２２日、ウソタン廣谷事務所を出発し、山越してパンケナイに行った。今回も廣谷組合の人夫を連れて行ったが、この人夫はパンケナイ山越に慣れており、かつて某新聞社員を案内したとの事である。峠を越えればパンケナイ上流に出るが、ここはパンケナイ秋山事務所と廣谷組合の出張所がある。その他北見屋の出店があり日用品を売っている。

この場所からトイマキを経て、枝幸の市街へは４里程である。馬は通わぬが道は険悪ではない。パンケナイの採取人は、ペイチャンの様に群集しておらず、上流から下流まで延長４里に散在しており、一見少ない様に見えるが、実は中々多いのである。パンケナイ事務所到着後、四辺を見て廣谷組合第４出張所に泊した。

２３日、パンケナイを出て本流を下り、１里余で中の川、ここから分水嶺を越えペイチャン上流に出た。分水嶺は標高が高く海抜６００m程である。近傍で最高峰とされるポロヌプリは、峠を隔てて数町で、山頂は手に取る様に見える。どうにかして行ってみたいと思うが、道は僅かでもその間には笹があり、ハイマツがあり、ガンビがあり、多く

の障害物のため軽々しい行動はできない。しかし、他日機会を得て登ってみようと思っている。

２５日、ペイチャンを発ち再びパンケナイに行く。今回は、前回と異なる道を選び、ペイチャン小川から上流１里の小さな支流に入り、水源を越えてパンケナイに出た。パンケナイには秋山氏の上の事務所と下の事務所があり、ここから上の事務所までは３里程あるので、この日は下の事務所に泊まった。

２６日、午前は雨、午後は晴れたのでパンケナイを上った。その後雨となり進むのが困難になったので、イセノヤという支流にある廣谷組合の駐在所に泊まる。イセノヤは、上の事務所と下の事務所の中間にあり、駐在所は監視がいるが立派な建物ではない。この日私が泊まった仮小屋は、枝幸砂金地における通常の小屋で、採取人は皆この様な小屋に住んでいる。小屋は適当な木を切って四方に柱を立て、２本の木をその間に立てる。それに梁等を結び、屋根と壁は笹とイタドリと木の皮で作る。木の皮は上等で、笹小屋が中等、草小屋が下等である。

さて、私が泊まった駐在所は、木の皮と笹で作った最上級のもので、室内も広く、主人である監視人と、客である私と、帯同する人夫４人が快く寝られる広さであった。この小屋は、事務所と異なり、食物等を貯えておくことができない。

食物は飯の外に味噌汁が出る。汁中の実は大抵はワカメかキリボシと決まっており、味噌汁の外に塩鱒が出る。私が行った時は、駐在所の主人が秘蔵の缶詰を出してくれた。この缶詰は最高のご馳走であるから、大いに賞味したところである。

２７日は小雨であったが、雨をついてイセノヤを巡見し、途中で鱒２匹を捉えた。鱒は８月下旬頃には手捕りできるところまで上って来るのである。夕餉にこれを料理して食卓に乗せたが、実に臨時の大馳走であった。山菜取りと魚取りは採取人がしばしば行う慰みであって、時々新鮮な副食物を得るのに必要な仕事である。

２８日、出張所を発ち、パンケナイ上流の廣谷組合第４出張所に泊まった。

２９日、出張所を発ち、山越してトイマキに出、川を下って海岸を通り枝幸の市街に帰った。この道がパンケナイの普通の通路であり、道すがらトイマキの砂金地を巡見した。トイマキは伊勢谷の鉱区で、料金を徴して採取人を入れている。採取法は流し掘りとカイ掘りである。

枝幸に帰ってみると置手紙があった。開けてみると曽我からであり、２５日の船で帰途に着くという。枝幸に来る時は３人であったが、今は１人になった。

第６　トーウンベツの諸支流の探検

私が枝幸に来てから１ヶ月になり、ペイチャン、ウソタン、パンケナイ、トイマキ、ケモマナイ、オチキリ等の砂金地を巡見し終えた。目下、採取人がいる場所は見つくしたから、これから少し内陸へ入り、採取人が入らない場所の探検をしようと思う。

採取人が多く入っていない場所は、事務所も出張所も小屋もないから、テントが必要である。そのため、テント泊に必要なものを廣谷組合に頼んだら、２～３日で用意してくれた。

８月３０日ウソタンに行く。３１日は風が強く雨も激しかったから休み。９月１日は晴天なので池山巡査、人夫３人と私の５人で発った。持って行った品を参考のため記し

ておく。

天幕（ 天竺木綿製、砂金採取人が用い、軽くて雨も漏らさない ）

畳表３枚（ 床とするため ）、毛布若干（ １人２枚 ）

鋸斧等、丸太と薪を作るため

鍋２つ、椀１０、箸等は必要に応じて作る

米２斗、味噌１貫、福神漬けの缶詰５個、塩若干（ ５人が７日間生活する ）

木綿製の草鞋１５足（ 草鞋は１足で３日間使う ）足袋若干

マッチ若干（ 多い方が良い、分けて保管する ）

蝋燭若干、この他外套類があれば好都合、魚を獲る道具は是非必要

私たち一行は、早朝ウソタンを出、フーレピラウンナイに着いた。ここには輪島組合の派出所がある。ここでしばらく休憩していると、石を叩きながら上って来る者がいる。誰だろうと見ると、茂呂氏の一行であった。せっかくなので一緒に上る事にした。

フーレピラウンナイは、トーウンベツから３里以内であるから、規則によって９月１日からは砂金採取ができない。これは鮭と鱒に影響があるからである。このため採取人が引き上げるので空屋が多く、私たちはその一つを占領し、茂呂氏は他の小屋に陣取って各々その夜の宿とした。

私たちが、眠りにつき夜も更けた時、ゴソゴソ、ガサガサ、バチャンと川の中を何かが通って行く音がした。これは熊である。やがて熊は反対の方に行ったので安心したが、熊が通ったのは、私と茂呂氏の小屋の中間で、その間は僅か１０間程しかなかった。

２日、我々は茂呂氏と別れ、山越えしてオネンカラマプに行った。オネンカラマプの上流には採金事務所があり、事務所は小屋であるが中々広い。オネンカラマプも９月１日から採金できず、事務員も引き上げるので、宿を借りることにした。

３日はシュブンウンナイ、イチャンウレナイを巡見し、再びオネンカラマプに戻った。シュブンウンナイ、イチャンウンナイは共にトーウンベツの支流である。

４日は大雨で、事務所でぼんやりしていた。

５日は晴天でピラカナイに行く。私たちが事務所を出てオネンカラマプを下って行くと、鱒が集まっているのを発見した。ここは砂金の流し掘りをした跡で、流し掘りの跡は河床が１尺程の深さで生簀の様になっている。早速下流を塞ぎ、１０分程で３０余匹の鱒を捕らえた。即座に身を下ろし塩漬けにしたが、これで３～４日の副食物に困らないだろう。

オネンカラマプを下り、南方の小支流からイチャウンナイに出、そこを上って水源に達した。ここからピラカナイまでは数１０町であるが、人が通るところではないので通行は非常に困難である。

まず第１の障害はハイマツである。ハイマツは足程の太さで１尺５寸も直立しており、上部は枝も幹も横や斜めに密集している。この林は数町も続いており恐る恐る通り抜けた。

次の障害物は野火による焼け跡である。焼けたハイマツの枝は折れやすく、押し分けて進むしかない。通り過ぎてホット一息して体を見ると、皆炭で黒くなり手も顔も黒焼きの様であった。

第３の障害物は笹薮である。笹の太さは直径１～２寸で高さは１丈もある。笹の密集

はブラシの毛の様であるから、押し分ける事も潜り抜ける事もできない。空身の私は何とかなるが、荷物を背負った人夫は非常な困難である。笹薮は水源から２０町余であるが、思わぬ時間を費やし日暮れとなった。

笹薮の中では泊まることもできないので下へと進み、ようやく今宵の宿を確保した。火を焚いて寒さを凌ぎ、飯を作って飢えを満たした。すると一気に疲れを覚え、テントを張ることもせず焚火のそばで寝た。上弦の月は雲間を出でて実に美しい。熊もおらず虫も鳴かず、深山の野宿は実に清々しく都ではとても得られぬ原始的快感である。

６日、野宿に別れを告げて出発した。ピラカナイの中流に木の皮の小屋がある。この小屋は輪島組合の派出所であるが、９月から空き家となっている。ここを占領してアイヌが１人住んでおり、この時は留守だったが、室内には鱒の焼魚が蓄えられている。その傍らの板に「タリキテモカワデサカナウルカシテアルカラクベシヤキサカナテツケテナラヌ」とある。これは「誰が来ても川に魚浸してあるので食すべし、焼魚には手を付けるな」という意味で、この下に年月日を記し「イタシトハ誰某」とある。これを見るとこの小屋のアイヌは中々学があると思った。私はこの小屋で昼食にし、その時に川に浸してある魚１尾を食し、小屋を去る際、食べた旨名刺に記した。その後彼のアイヌに会った時、彼からこの日の事を聞いたから、私が書き残した事が解ったのに相違ない。アイヌとて軽蔑できない。

さて、次の日はピラカナイを下り、南方にある支流に入り、適当な場所を選んでテントを張った。

７日、ここを出発して、支流を上り山頂に出た。この支流に入ったのは、ここから山越えすれば、ペイチャン支流の間の川に出ると思ったからである。山頂に登るとガスが立ち込めて一寸先も見えない。ガスがかかると慣れた道でも誤る事があるので磁石を便りに進んだ。これが間の川だろうと思い喜び勇んで下ったが、昨日泊まった場所に出た。あきれてものも言えないが、悔いてもどうしようもなく今夜もここに泊まった。

８日朝から雨が激しくなり、テントから出ることができなかった。米が足りなくなってきたので粥を食うことにし、鱒を食い食料を節約した。

９日は嵐になった。米は欠乏し鱒も食い尽くした。しかたなく、人夫をピラカナイに行かせて鱒を採らせ一同それを食った。

１０日も雨が止まない。今日も同じテントにいるが、米の一粒も無いので意を決し、ピラカナイを渡り、ウソタン中の川へ引き上げる事にした。ピラカナイを渡るのが困難だったら、彼のアイヌに米の分配を頼み、水が減るのを待とうと思った。さて、アイヌの小屋に行くと、彼の方から米の分配を乞われ、米を分けてもらうというあては外れてしまった。いよいよウソタン中の川へ引き上げる外ないのである。

ピラカナイ右股を上り、分水嶺を越えてウソタン中の川の水源に出、２０町程下って中の川輪島組合派出所に着いた。ピラカナイの川水と、雨と、分水嶺の露を含んだ深い笹薮のため、体は頭から足まで濡れ、派出所に着いた時は、人夫も私も服のまま水泳をした様なものであった。

ここはウソタンの事務所に近いから、人夫を帰らせ、私は派出所に泊まった。翌日はペイチャン小川事務所まで行ったが、疲れていたので２～３日滞在していると遠藤学士が来た。私は学士と共に小川の砂金地を巡回した。

１４日、人夫を連れてペイチャン小川の水源を越え中の川へ行った。ここには輪島組合の派出所があり、この夜はここに泊まった。私が巡回した時は、中の川には３～４０人の採取人がいた。

１５日、派出所を発ってペイチャン本流に出た。本流には熊の足跡が多数あり、周囲には山ブドウが多いから、不意に出会わないとも限らず、用意したラッパを吹いて進んだ。ペイチャン上流に行き、モペイチャン付近で、熊の足跡の新しいものを見た。午後４時頃ニセイパオマプに着いたが、ここは河井氏の鉱区で事務所もあり、この夜はここに泊まった。

１６日はニセイパオマプを巡見し、水源を越してペイチャン小川の事務所に行った。この道が河井の事務所からペイチャン小川事務所に行く本道である。私はペイチャン小川に一泊し、翌日枝幸の市街地へ帰った。

第７　フーレップ、オチシュベツ、海岸砂金の視察

９月２２日、私は中川氏と共に、フーレップの砂金地を見るため馬に乗って出発した。ポロナイ川を渡りオキシナイの漁場に一泊した。

２３日、オキシナイを出て小舟に乗ってポロナイ川を遡った。ここは殖民地で移民が多く、付近の農家に採取人がどれ程入っているか聞くと、メムプと言う川の上流で掘っているという。

午後は海岸を北上し、トイナイとオチシュベツの間で、浜砂金を採取しているのを見た。この辺は石川氏の鉱区で、料金を取って採取人を入れているが、この日は１０人程が掘っていた。海浜の砂金地を通覧し終え、オチシュベツ川を渡って北上し、オタルペンルムの漁舎を宿とした。

２４日朝、オタルペンルムを発ちオチシュベツ川の探検に出た。まず海岸に沿ってオチシュベツの河口に出る。この川の両岸は１里余が殖民地であるので、終点で馬を下り、オシラリカオマプと言う支流の地質を調査し、川の砂礫を淘汰して砂金がある事を確認して帰った。

２５日、オタルペンルムを発ちフーレップを視察した。フーレップは枝幸砂金地の歴史上著名な地である。枝幸が日本のクロンダイクと称されたのは明治３１年秋であったが、これより先、枝幸で初めて砂金が発見されたのは、明治２６年頃、フーレップ河口の海浜であった。これが導火線となって、３０年６月に枝幸砂金地が発見されたのである。フーレップは正に枝幸のオノコロ島である。

第８　神保博士とウソタン、ペイチャンに赴く。ポロヌプリに登る。

神保博士が枝幸に来られると聞いたのは９月１８日で、２８日に博士が到着された。私は２カ月余、東京の話を聞いていなかったが、恩師に面会して東京の事情を聞けたのは実に嬉しかった。

１０月１日、博士一行は枝幸市街を発ち、オチキリ川を経てウソタンに赴いた。一行の面々は、博士と私、廣谷事務所の某、鉱区主某、事業主某である。博士はウソタンの数日間、ババコロシ、エトルシュオマプ、ウソタン上流秋山採取所、馬道、中川氏の事業等を通覧された。

５日、博士一行はウソタンを発ち、ウソタン中の川の水源を越えて、ペイチャン小川の輪島事務所に投宿し、翌６日、小川及び付近の金田を視察された。

７日、博士は茂呂氏と私、人夫３人を連れポロヌプリ登山を企てた。早朝ペイチャンを発って本流を上り、支流からパンケナイ中の川に行き、長内事務所に泊まった。この日はパンケナイの峠にテントを張ろうと思ったが、峠のテントは良くないというので、パンケナイ中の川に下ったのである。

８日は雨が降っていたが、おしてポロヌプリに登る。事務所を発って、ペイチャンの峠まで来たが、天気は晴れて雲一つなかった。峠からポロヌプリに登るには道が無い。峠の頂から南に向かい、第一に出会うのは笹薮である。ここの笹は丈が４尺～５尺で、進むのはさほど困難ではない。次に出会うのはカンビである。カンビというのは樺の木の類であるが、跨ぎ越しや枝渡りなど、進むのは少なからず困難である。カンビの森を越すとその先に短いハイマツがある。

ポロヌプリの頂上は輝緑凝灰岩で、その岩の上にハイマツがあり、所々にガンコウランやコケモモが密生して、これらの間に黄色の地衣が生えている。ポロヌプリは標高８００m程であるが、植物が高山帯の特色を示しているのは、場所が北海道の北部だからであろう。

１０月８日は東京ではまだ残暑だが、北見では早くも晩秋の気配である。この日は快晴で眺めが良く、紅葉にエゾマツ、トドマツが錦絵の様であり、遠くには、天塩の国を越えて日本海を望み、利尻、礼文は手に取る様に見える。北方を望めば宗谷岬は近く、その先には海を隔てて樺太が見える。余りの景色の良さに時が過ぎ、急ぎポロヌプリを下り、パンケナイ中の川を越して、秋山氏の上の事務所に泊まった。

９日午前は、博士に従いパンケナイ上流や付近の地質を調査し、午後はトイマキを視察して、川を下り海岸に出た。ここで茂呂氏と別れ、私は博士に従い枝幸に帰った。

第９　博士の斜内巡見、ウソタンにおける砂金存在の研究、私の出立

私は、９日に枝幸に帰り帰京の準備に追われていた。博士は１１日にスヤウンナイに赴かれた。スヤウンナイは岩石が露出し地質学上重要だからである。

１３日、私は枝幸を発ち帰京の途に付いた。枝幸に来たときは心細くもあったが、日が経つうちに知り合いもでき、土地にも慣れて自分の故郷の様な気持ちになっている。

今この地を離れ、懇意の諸氏と別れていくのは、帰京と言うより遠くに旅する様な気持ちである。船は午前に枝幸を発ち、黒煙を吐いて北に進む。近くに見えていたポロヌプリは次第に遠くなり、遂には見えなくなった。

神保博士は、これまでに砂金地の地質その他を通覧されたから、今後砂金の有様を研究しようと１４日再びウソタンに赴かれた。この研究のために博士が行われたのは、学術上相当と認める所に穴を掘り地質の模様と砂金の存在とを実見するのである。博士が試験的に穴を掘られたのは、中の川からオチキリコアンウソタンナイまでのウソタン本流と河段の地である。穴の数は１５程であるが、砂金の多い所もあれば少ないところもあり、決して一様でない。その結果は、砂金存在について新知識を与えるだろうが、それは博士の研究されることで、私ごときが意見を述べるものではない。博士は１４日から１０日程ウソタンで研究され２６日の定期船で枝幸を出発された。

第１０　帰り道

私は、１０月１４日小樽に着き、その夜は越中屋旅館に泊まり、翌日札幌に行った。１７日から２６日まで夕張砂金地を巡回し、その間面白い事も苦しい事もあった。

２８日、博士が札幌に着き、空知砂金地を巡回することになり、２９日に出発した。その夜は旭川に泊まり、３０日は十勝線の鉄道で下富良野に行き、建築列車に便乗して金山停車場に行った。金山停車場は空知川本流とトナシベツ川の合点にあるが、ここには砂金事務所もあり、採取人もいて賑やかである。私は博士と共にここの駅逓に泊まった。３１日は砂金地を通覧し、博士は１１月１日に、私は２日に札幌に着いた。

１１月３日、この日は天長節で観兵式があったので、これを見て札幌を発ち、室蘭から薩摩丸に乗って翌日青森に着いた。午後６時発の東京行の汽車に乗ったが、青森から東京までは２４時間もかかる。私は退屈に耐えかねてアクビばかりしていたら、隣の人が見かねて「ご退屈様」と言う。いや「ご退屈様」を言われたその時の私より、私の書いたつまらない雑話を読む諸君の方が余程「ご退屈様」だ。

明治３３年１１月２９日、３０日の両夜記す

意訳　北海道枝幸砂金地巡見

著　者　　へるふね

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社